第 8 回：初心に帰る

教場長　田中仙融

先頃友人と話をしていて、「茶道を習う方は、みなさん綺麗な美しい所作、振る舞いを日々身につけたいと思って始められたのでしょう？」と言われ「はっ」としました。
私たち茶道を習っている人の立ち居振る舞い、ものを扱う所作は、はたしていつも美しいでしょうか？

私自身、3 歳の晴れ着を着て、炉前に座り柄杓を構えた姿を祖母の菫仙から「とても綺麗よ」と褒められたことが嬉しく、今に至りましたので、綺麗になるためにという意識は薄かったかもしれません。
しかし、稽古を通じて、日本人が道具を大切に扱ってきた歴史や、そのものに合った扱い方や飾り方を考え出し、次の世代の人に大切に伝えていったという経緯を考えながら、点前に臨むと、自然に道具を愛おしく思え、どんなものでも心を込めて扱うようになりました。

本来、「うつくし」という言葉は小さなものをかわいいと眺めることから、美しい、綺麗という意味合いに転じてきたといいます。そのように、ものに対する気持ちは「慈しむ」という語にもなってきます。つまり、美しい所作は自らが手先、指先で作り出すものではなく、その扱うものや、触れるものに対しての愛情があってはじめて、見る人がその動きを綺麗だと思うのでしょう。

「一本の線の両脇を足で進むのよ」と母に畳の上での歩き方を教わり、信濃町駅までの歩道石畳を一生懸命左右の足で挟んで歩きました。前会長[1]に点前を見てもらえば、「敷き合わせが一目空いた」、「それでは詰まりすぎ。踏んでいるよ」とそこまで極めるの、と本当に悲しくなりました。しかし、現在教える立場、教場長という名前を頂戴して思うことは、やはり曲がりなりにも「先生」と呼ばれる人は、「まあいいか」で済ませるわけにはまいりません、ということです。自分なりに解釈してできたつもりというのも良くないのでしょう。常に自己を見つめ、規範に叶っているのかを正す厳しさを自分に持っていなくてはなりません。

私の著書『はじめての茶道』の中でも書きましたが、美しい所作、自然な動きに添い、器物を扱うしぐさが美しく、優しく見える、そして無駄な動きのない、そんな点前を目指したいというのが私の目標で、その意味を少しでも多くの方と分かり合い、伝えていくことを今年のテーマにしました。教えていらっしゃる先生方、習っている方々一緒の目標に進んでいきましょう。

平成 26 年 2 月発行　会報「えんじゅ 78 号」掲載

[1] 仙翁前会長のこと